

「県民と県議会との意見交換会」 **花巻会場** の概要

〔日 時〕 平成28年4月26日（火）14：00～16：00

〔場 所〕 花巻地区合同庁舎 第1・2会議室

〔テーマ〕 「**地元の資源を生かした地域の魅力づくりについて**」

〔参加者〕 （7名）

伊 藤 達 也（㈱伊藤工作所代表取締役社長）

久保田 浩 基（志戸平温泉㈱代表取締役社長）

小 友 康 広（㈱花巻家守舎代表取締役）

松 村 淑 子（㈱メガネの松村常務取締役）

司 東 道 雄（NPO法人フォルダ理事長）

昆 野 将 俊（NPO法人芸術工房常務理事）

小 堀 陽 平（西和賀町地域おこし協力隊隊員）

〔出席議員〕 （8名）

菅野ひろのり議員、佐々木順一議員、関根敏伸議員、佐藤ケイ子議員、樋下正信議員、
工藤勝子議員、渡辺幸貫議員、臼澤勉議員

〔オブザーバー議員〕 高橋元議員、名須川晋議員、高橋孝眞議員、川村伸浩議員、木村幸弘議員

〔事務局職員〕（6名）

◆ 参加者自己紹介及び現在の業務や活動状況の紹介

○伊藤さん

伊藤工作所は、父親が1967年に創業し、最初は、建築金具の製造を行った。その後、雪印乳業花巻工場を立ち上げると同時期に誘致された企業の設備のメンテナンスに本腰をいれ、今では花巻を中心に県内、県外の食品加工業者の工場の生産機械のメンテナンスとその工場で省力化の必要な機器の開発から製作そしてサービスを行っている。

一昨年初代の父親が亡くなったが、弊社創業から今年で50年を過ぎ、さらに飛躍ということで、社員一丸となって、一生懸命取り組んでいる。

現在、その他に花巻商工会議所青年部専務理事を務めており、2011年には、花巻青年会議所理事長として震災で被災した仲間たちを支援し、今から11年前に発足した花巻信用金庫の花巻夢・企業家塾の3代目塾生会会長として94名の仲間たちと一緒に日々勉強している。

○久保田さん

私は、志戸平温泉株式会社の社長と、日本旅館協会東北支部連合会の会長も務めており、旅館業界全体のことをいろいろ行っている立場にある。

東北の外国人客の数が去年は51万人泊で、震災前の状況にやっと戻ったが、一方で大変な危機感を持っている。旅館協会で各温泉地の宿泊調査を行っており、東北でも調査しているが、東北全体で2月の外国人客が8千人くらいなのに対し、北海道は1カ月で30数万人だった。さらに、定山溪温泉、洞爺湖温泉、登別温泉などは、インバウンドの客が、日本人客より外国人客が多く、6割が外国人というところも出てきている。東北が外国人客の誘客に大変遅れ、相当差をつけられている。これを一旅館で頑張るとか、岩手県だけで頑張るとかのレベルではなくて、東北全体で頑張らなければならないと最近ひしひしと感じている。東北にどうやって誘客し、それから岩

手県にどう誘客していくかという位置付けが必要ではないかと考えている。

○小友さん

私は、曾祖父の代からやっている小友木材店の4代目の代表を務めながら、今、東京のITの会社の役員もしており、また、花巻家守舎という地域づくりの会社を運営している。花巻家守舎は去年の4月1日に立ち上げた会社で、リノベーションまちづくりを推進している。リノベーションまちづくりというのは、半径200メートルという極めて限られた小さなエリアの遊休不動産を使って、そのまち、エリア自体を変えてしまっ、そこに住む人、働く人、集う人を変えていこうという発想で行っている。今、花巻駅前エリアの第一弾プロジェクトとして、当社、小友木材店でもっていたビルを花巻家守舎にプロデュースを依頼する形で、今まで10何年使われていなかった遊休不動産に3個テナントが入り、そこで働く人が20数人増えた。全国では、そういったリノベーションまちづくりのやり方がどんどん広がっており、ある地域では、1個の商店街の雇用が3年間で350人増え、通行量調査が40%増えたという例が出てきた。

たまたま、花巻市のマルカンデパートが閉店するという話を聞き、我々が行っているリノベーションまちづくりでマルカンデパートをひとつの町として見立てた場合に、半径200メートル以内のエリアをどう変えていくかということを中心に、今まで全部直営していたところを我々がプロデュースしてテナントを入れ、そのテナントのビジネスが最もうまくいくようにスキームを構築して何とかできるのではないかとという取り組みを行っている。

リノベーションまちづくりの分野から見ると、いろいろなことをやろうとした時に規制があつてできないことが極めて多いと感じており、その部分が改善されると我々は極めてやりやすくなると思うので、本日はそのような話ができればと思っている。

○松村さん

1914年に曾祖父が四国から、時計店を北上市の黒沢尻に開業し、今年で102年になる。父も叔父も私の夫もいとこの夫も祖父も婿で、婿家系で102年続いている。

大学時代にチアリーディングに出会い、紅白にも出場した。私たちは、肩に人をのせて、その上に人をのせて、さらにまたのせることを女子だけでやる競技である。10年前から活動を始め、今100人を超える会員数になった。東京で活動していたときに、東北の人たちは、すごく実力があるのに、アピール力がとても弱く、場慣れをしていないので結果を出せないことが多いと感じる。小さい頃から慣れさせていけば、いろいろな仕事をする上で役立つのではないかと感じており、ものおじしない人になってもらいたいと願って子供たちを教えている。

商店街の活性化に必要なことは何かということだが、商店街の活性化は必要か、そもそも商店街は必要かというところから考えなければならぬと思っている。

○司東さん

総合型地域スポーツクラブとって国で進めている事業で、今3,500のクラブが全国の各市町村にある。今、フォルダでは、参加者が年間31万人くらいで、職員を併せて15人、百種目くらいを教室で行っており、フォルダは日本の3,500クラブの中ではトップと国からお墨付きをいただいている。

イベントとしては、大きなところでは、最近では、国立競技場の座席を移して、国体の開会式会場に国立競技場の座席を移すイベントを行っている。他には西和賀町で岩手県と秋田県の県境を綱引きで決めるイベントを行っている。

去年は、国体イベント4件を受託し、今年も国体イベントをどんどん打ち出していきたいと思っている。これからは、県民運動の盛り上げを企画し、それを実現していきたいと思っている。

最近では、熊本県に避難所のアドバイザーとして震災ボランティアで行ったりオリンピックの仕事なども行っており、岩手県だけではなく、日本や世界に分業を広げていきたいと思っている。

○昆野さん

芸術工房は、13年前さくらホールをスタートさせる時に、運営財団と一緒に立ち上げ、さくらホールの支援や一般の芸術団体等の支援を行った。当NPOがさくらホールの外で毎年秋冬にイルミネーションをやっている。今は、県南広域振興圏の岩手県文化芸術コーディネーターという仕事を担当しており、アーティスト同士のネットワークづくりや地域の方々とアーティストとのコラボレーションなどいろいろなつながりをつくるために活動している。

北上市の口内地区の浮牛城祭りなど地域の祭りがあるが、我々がお手伝いして新しい魅力ある芸術活動を発信できないかということで、今スコープライブを企てている。スコープ三味線は有名だが、三味線にこだわらず、地域の方々がいろいろな楽器をスコープで演奏するようなまちになってくれればと思っている。

今回の本県開催の国体をきっかけに、まちの文化関係の人たちも国体のおかげでまちが変わったというものを残したいということで、他県から来る方々を我々NPOが中心となって市民で盛り上げるライブを毎日北上市のどこかでやる企画を進めている。国体がきっかけで、その後毎年、まち中でいろいろな立場の人が、アーティストと仲よく、まちの賑わいのための活動になってくれればいいと思っている。

○小堀さん

私は東京出身で、現在、西和賀町の地域おこし協力隊として活動している。

昨年、一般財団法人地域創造が発行している雑誌で、私が今勤務している西和賀町文化創造館 銀河ホールという演劇専用劇場の取り組みについて取り上げていただいた。町民劇場、高齢者演劇、それから学生演劇合宿事業という3つの事業のうち、私が行っている学生演劇合宿事業は5年目に入り、この事業をきっかけに私は西和賀町に着任した。きっかけは、芸術工房の新田満さんだった。震災後に知り合い、西和賀町には温泉があり、劇場があるから、演劇の学生合宿をやらせないかということで、やらせてもらっているうちに、京都に引っ越し、京都から通うのにも時と経費がかかるということで西和賀町に来た。温泉旅館を利用して学生演劇合宿事業をやっているが、今年間で約500泊以上、全国から芸術関係の学生が西和賀町に来て、基本的に夏と冬に合宿している。

演劇合宿事業だが、今、演劇の合宿と美術の合宿を年に2回夏冬やっており、その他に、町の事業者のポスターをつくる事業をやっている。また、県立西和賀高校の美術部と一緒にアニメーション製作を行っているが、基本的に全部学生たちがやりたいといったことをやってもらっている。なので、西和賀町は天国だといってみんな帰ってくる。

そんな形で、運営自体は全国の若者や学生に西和賀町を開いていってもらい、その中で、地域の人たちにも関わっていただき、地域の人たちを元気づけ、地理的環境もあるので、少し目を外に見開いてもらい、外からとにかく情報を入れてもらうという活動を行っている。

個人的な印象だが、西和賀町役場職員ががんばっている一方、住民がかなり役場頼みになってしまっており、自分たちで自分たちの町を維持していく活動ができないものかと考えている。自分の今住んでいる地区では、廃校活用という事業を十何年やっており、その運営委員会に自分が入る形で、職員ではない形で関わりながら、地域の中からアクションをおこせないかと考えている。

◆ 意見交換

○久保田さん

去年から、リクルートのじゃらんで、12月から2月の間、遠野市と花巻市の宿泊客が次の日、遠野市の観光施設を割引で安く見られるキャンペーンを行った。今年は、北上市を入れて、北上観光協会と遠野市観光協会、花巻観光協会と花巻温泉郷観光推進協議会の4つの団体で、じゃらんの本に12ページの特集を組み、志戸平温泉などの温泉の入浴券をつけ、遠野市の旅館に泊まっても、花巻市の温泉に入浴できるというプランを相互に行った。その結果、遠野市、花巻市、北上市の宿泊実績が120数パーセントになり、東北の中でもダントツの数字が出た。我々とすれば、宿泊を目的とする客のほかに、この地域に来たくて泊まっていく客をどうつくっていくかが大事だと思う。そのために観光資源をどう発信するかが重要だと思う。

今後は、花巻市、遠野市、北上市、できれば奥州市などの県内地域とも連携しながら、じゃらんや楽天などの情報発信力があるところと提携し地域を超えてどう売っていくか、観光客の数ではなく、いくら地域にお金が落ちたかという観点からもっと考えなければならない。観光もこれからは、人数をカウントするのではなく、「稼ぐ力」をどうするかということから考えなければならないと思う。

○松村さん

北上市は、花巻市の宮沢賢治や温泉、遠野市のカップや遠野物語のような強いインパクトのある観光資源がない。何があるのかというと、商業施設や文化ホール、芸術工房がやっているさくらホールなどは非常に評価が高く、コンサートやいろいろなオペラなどがどんどん来ている。また、実は商業がすごくがんばっている。台湾と花巻空港がいろいろ提携してどんどん台湾の方が来ているので、インバウンドも視野に入れて商売することも考えた方がいいと思っている。5万円のトップブランドの眼鏡が、中国では小売価格が高く設定され10万円で売られている。だから中国人は銀座に来て正規品を日本価格で買って行く。しかし、銀座では1カ月100本売れるが、どうしても岩手県は人が少ないこともあり、当店は半年で100本売ればよいという決定的な格差が生まれる。最近では、中国人は観光にも意識が移ってきたということで、観光を目的について爆買いしてくれる中国人が岩手に来る仕組みをつくれないうちと思っている。

○久保田さん

北上市には産業観光がある。花巻市は温泉があるが、泊まってどこに行くといった時に、マルカンドパートに行ってソフトクリームを食べて帰るなどしかない。花巻市の中、遠野市でも北上市で奥州市でもよいが、その中を回遊させる仕掛けをもっと考えなければならない。

○関根議員

北上市、花巻市の都市力、人口規模と比較すると、西和賀町はある意味非常に厳しい。そういったところで、いろいろな仕掛けをしていることはすごいと思う。一つは、西和賀町でこういう活動をしている時に、北上市、花巻市、あるいは広域でこういったNPO関係者とか、まちづくりで頑張っている方との意見交換や情報交換の機会があるのか。また、西和賀町の雪と森林といった資源をこれからどう地域の資源として生かしていくのか、御意見があれば伺いたい。

【回答：小堀さん】 観光関係については、かなり頑張っているが、近隣の地域の方々、商工会関係で何か連携をしているかということ、実感として我々のところには届いていない。西和賀町には大きい商業施設はないが、先ほどの話のように広域の中で回遊する仕組みとして、自然体験や、食品、素材のおいしさや、いろいろな体験型の観光が強みだと思う。外部の客が

というより、近隣の人たちが知っているのだから、昔の湯治文化の延長のような形で人が西和賀町に来ているのが実態と思う。もっと遠いところから、あるいは海外からみた時の西和賀町の地域資源の価値を町の中で民間の人たちが捉える動きが非常に弱い、行政が頑張ってしまうので、そこら辺が難しいところだと思う。

もう一つ言うておくと、どうしても行政主導でいくので、行政もいろいろなところに視察に行き勉強はするが、どうしても、行政マンが何をしているかを見てくるので、結局、行政主導が深まっていくというのが悪循環ではないかと感じている。

○関根議員

県北や沿岸地域の地域おこしで苦勞したことがあると思うが、御意見があれば伺いたい。

【回答：昆野さん】 地域の人たちが地域づくりを行う状況になっている。地域の人たちが、仕事でやることができればいいが、仕事の時間以外に自分たちの地域のことをやれと言われていくところに無理がある。ほとんどの人が仕事を持っている、または高齢者の世話で家を離れられないなどいろいろな理由があって、地域にプラスアルファのことができない。若い人たちが不足しているという話がある。ところが、若い人たちに意見を聞くと、若い人たちが今仕事を四六時中している、なかなかいいところにも勤められなくて、アルバイトのような仕事でも我慢してやっている状況で時間もたくさん働かなくてはならない状況もある。そして、そのあげくの果て、地域に残ってくれればいいが、若い人たちは、少しすると東京に行く。今、高齢の人たちに何ができるかという現状ではないか。県や議員の方々に聞きたいのは、実際にこういう現状で、行政に頼ってしまうことが問題になるとすれば、行政マンが行政を離れて地域の中に入って何か貢献活動を行うスタイルを示してもらえないか。

○佐々木議員

合併前は、県内に62市町村あり、その頃は、旧町村では役場の職員といえども、地域に戻れば地域の住民であり、公民館の自治活動は、役所のポジションではなく、そこに住んでいる一人の地域の人間として活動してきたが、合併して守備範囲が大きくなり、なかなか土日があっても、地域活動を行うことは、合併前よりは少なくなっているのは確かだと思う。将来的には、地域貢献的な休暇は優先して取得してもいいという仕組みをつくるのが大事なのではないかと思う。

小友さんにお聞きしたいが、花巻市のマルカンデパートについて、規制緩和のお話とどういう将来があるかについてお聞きしたい。

【回答：小友さん】 先ほどの地域貢献を担う人材の課題に関しては、難しい問題だが、私個人としては経営者の問題と思っている。当社小友木材店の従業員は10人ほどだが、副業を推奨している。そもそも、私は自分の活動は地域貢献活動と思っていない。自分が住みたい部屋をつくっている活動なので、そこで楽しくやりつつ儲かる仕事をつくれればそれが仕事になる。それを、どれだけのコストをかけて、どれだけの収入になるのかということを中心にできれば、ビジネスと地域貢献は両立できると思う。根本的には教育の問題になってくるが、「大手企業に勤めて年収いくらもらって」のような画一的な価値観の中で、年収300万円だろうと豊かな生活ができることをどうやって喚起できるかということを経営家として身に付けていく方が大事だし、そういう人をどうやって育てていくかが重要だと思う。そういう活動をする事業家を応援する仕組みが極めて重要だと思う。

もう一つ、規制緩和と言っているのは、例えば、小友ビルという築53年の古いビルがあり、

地下に倉庫がある。音漏れも全然せず、実際、爆音で音楽を鳴らしても外に迷惑をかけない。そこで、地域で、DJをしたいという若者が何十人もいて、やってみようとしたら、役所がそこは倉庫だから、不特定多数の人は入れてはいけないという。私有地だし、お金もとっていないのに、ではどうしたらいいのかと聞いたら、もう一つ階段をつけなさいという。今から地下に何百万円もかけて階段をつけないとできないのに、一方で遊休不動産、空家を活用しろと言われても難しい。もちろん危険な建物に人を集めるということは問題があるが、最小限のコストで使うという意識や協力体制が欲しい。行政の発想は、どうやったらできるかというのではなく、どうやってやらせないかというものだと思う。許可した人が責任を取らなければならない、自分が許可して、うまくいっても評価されない。それによって事業がうまくいってDJが集まってみんな楽しく過ごせる地域になったとしても、そこで何か事故がおきたら責任をとらなければならない。だから、基本的にやらせないような制度になっているのが現状なので、すごくやりにくい。

○小堀さん

似たような規制緩和の話で消防法になるが、私の住んでいる地区の廃校活用の取り組みにおいて、最初は体験宿泊施設として使用して、地域の方々が持っている生活文化の技術を継承するという意味も含めてスタートした。主に教育委員会の主催事業を行っていたが、地域の運営委員会として、リフレッシュして再活用しようという話をしていたところ、消防法の規制で宿泊が難しいということが出てきて、使いたくても使えないということを感じた。

もう一つ、若い人が自分の仕事以外の時間で地域貢献活動をするというのは、正直に言って考え方が古い。副業ということだけでなく、大人たちが子供の段階から、この地域で食べていくのなら、役場、農協、信用金庫、第三セクターに就職するしかないと言ってしまうので、起業マインドが育たない。起業の仕方もわからない、サポートもない、そして大人は認めないということもあって、西和賀町は全部自分たちのプライベートで頑張っている状況がある。プライベートでやっている、やりたい人は頑張るし、それ以外の人は時間をつくらない。やらない理由ができていくので悪循環だと思うし、経営の問題だと感じている。

地域の中で、住民が自主的に自分たちの地域づくりをしていくことを考えた時、若い人に限らず、何かしらそれで収入を得るとか、他の仕事をある程度間引いても別のかたちで収入が得られて、かつ地域が再生していくというモデルを作っていないと難しい。これを行政がやっていると、行政サービスが行き届かなくなった瞬間に地域が衰退していくのは想像に難くない。

必ずしも民間企業がということではなく、もう少し、地域の人たち、生産者が自分たちで販路拡大ができるとか、西和賀町にブランドを感じたり、思い入れを持ち、多少単価が高くても購買層になってくれる人たちとのネットワークをつくる必要がある。

○小友さん

かけたお金より儲かったらダメではないかと言う感覚なのが行政。むしろ行政もきちんと儲けて、地域の市民、まちに再投資するくらいのことをやってもらった方がいい。

○樋下議員

今の話はそのとおり、企業は利益を追求しなければならないわけだから。私たちも議会で行政の人に民間感覚という話をするが、すごく大事な意見だと思う。

○工藤議員

遠野市も中心市街地はシャッターの店が多くなってきている。魅力がないのか、まちで商店を

やっている人たちが、自分たちのまちをつくろうという気概がない。市議会議員が一人もまちの中心市街地にいない。市議会議員は、ほとんど農村地帯に住んでいる。自分のまちを変えようと先頭に立って行政に言ったり、そうした気持ちを持った若い人たちが出てこない。

松村さんのように中心市街地に女性として関わっていて、女性としてどういう意見をお持ちなのかお聞きしたい。

〔回答：松村さん〕 さくら野百貨店は19年前にビブレという名称で、再開発で今の場所に来た。

後継者のいる店が40軒弱くらいだったが、再開発で20軒位が再開発該当地となった。その時点で、ビブレの中に入ってテナントとしてやっていく方法と、商売を止め他の代替地に家を建てる方法と二択が与えられた。20軒のうち14軒は、他の土地に行った。

まちの中で商店をやるというのは、昼夜を問わず、プライベートと仕事の境が全くない。それが百貨店との違いで、疲弊してしまったというのが事実。頑張って両親が働いたお金でいい教育を受けて、安定した職業に就こうという構造にならざるを得ない状況が全国の商店街にあるのではないか。

私は、生き生きと働く両親の姿を見ることと、すごくまち中が楽しく仲がよかったこと、祭りの躍動感が大好きで、鬼剣舞、鹿踊り、みちのく芸能祭りを商店街がやっていたことが記憶に刻まれて戻って来た。

まち中で何が出来るかという、今となっては手遅れのところもあるのではないかと思っているが、それでも生き残らなければならない。商店街として、母として父として子供たちを育てて、まちを育ててとなった時には、自分たちだけではどうにもならない。

北上市は幸運なことに、これ以上大きい商業施設が入らないように規制した。あじさい都市という宣言をし、農家の田んぼを潰してまで他の商業施設が入らないようにし、道路も潰されないようにし、緑も守るように規制を変えた。行政と密に連絡を取り合っていくことがすごく大切と思う。バックキャストिंग（自分たちが望む未来をつくるために今何をすべきかと目標を立て行動すること）という考えで北上市の行政は運営している。北上市の人たちが商店街に声をかけてくれたから、連携できたからこそできたのかもしれない。

○工藤議員

なかなか難しい問題だと思う。まちの人たちも商店街の必要性は認めている。コンパクトでも中心市街地に残って、その中で生き生きと活動していけばいいと思っている。そのためにも、もう少しまちの人たちがどうしようかと考える必要がある。

遠野市は銀行や役所が休みになるとまちを誰も歩いていない状況だ。道の駅遠野風の丘の直売所には5千人、6千人が集まっているので、そこから商店街に回ってきてもらうようなかたちをと考えているが、何から行動を起こしていけばよいか、御助言があればお聞きしたい。

〔回答：松村さん〕 いろいろなイベントや催し物を行っても、一過性になる。私たち商店街の若い人たちは、来てもらうだけではなく、インターネットで商売もしているし、SNSでも発信している。大手でできない工夫が、ポイントだと思う。

○渡辺議員

観光では、とにかく物語性と、その地域がどういうところなのかということが重要だと思う。

先ほど、規制緩和の話があったが、グランドキャニオンに行くと「own risk」(OWN・リスク)という小さな札があって、落ちたら自分の責任となっている。行政はどこまで守るかという問題

がある。何でも税金では、もう成り立たないと思う。

町並みの件は、東北の問題はまちを壊すところだと思っている。山陽道に行くところまでどこに行っても古い町並みが残っている。バイパスだけはつくるが、まちのよさへの執着がある。私たちもまちの誇りというものに執着すべきだと思う。遠野物語を西和賀町の銀河ホールで見て大変感動した。同じものを遠野市で見たら、会場が広くて物語性が消えてしまっていた。夢中になる職員をもっと育てることと、地方消滅が呼ばれ財政が厳しい中、規制緩和と own risk (OWN・リスク) の時代に向き合うことが必要だ。そして、私たちはもっと物語性を作らないと、東北は遅れる。

○佐藤議員

スポーツ合宿というと、それぞれが競争する。花巻市もよいラグビー場を持っているし、北上市もよい競技場を持っている。そこが連携するのではなく、それぞれ勝手に競い合っているという感じがする。

私は、このエリアでスポーツ合宿をするのであれば大学5校、6校が集まって、その中でリーグ戦ができるように花巻市、北上市でやっていけばいいと思う。北上市はスポーツ合宿をすると補助金を出す、それは本当に効果があるのか。もっと別の手法はないかとも思っている。

【回答：司東さん】私のところでは、授業を教えている関係で早稲田大学の学生が毎年やってきて、県内で一週間くらい合宿している。それがいいのは、その後、卒業してからまた岩手に来ていただいたり、たまたま熊本県に勤務されていて、熊本の震災で情報交換して動いたりとか、いろいろなことを生み出してくれる。人づくりをすると、いろいろなことが岩手に還ってくると感じている。

今年の12月からオーストラリアの方がたくさん北上市に来る。これは、夏油高原スキー場がオーストラリアに売り込んだおかげで、ニセコ、白馬、三つ目のスキー場として夏油になりそうである。そうすると、海外からたくさん人が来る。北上市の問題は、英語が出来ないホテルしかない。もう一点は、温泉に入りたいという要望があると花巻市の志戸平温泉、花巻温泉を薦めるしかない。そういう連携がこれから図られてくるのではないかと。一番オーストラリア人が求めているのは、ゲレンデスキーではなく山スキー、林の中、できればスキー場でないところを滑りたいというもの。行方不明、死亡したとしても自己責任だと言い張るのがオーストラリア人。例えば西和賀町の山に行ったらよかったですとなると、西和賀町がメッカになるかもしれない。

そうすると次の行動は、コンドミニアムを建てること。夏油のそばに家をつくるような規制を緩和できないかという話をオーストラリア人から言われている。そうすると、オーストラリア人の別荘がどんどん立ち、海外との関わりが出てくるのではないかと思っている。

【回答：久保田さん】一番は、スポーツ合宿が非常に大事と思う。今年は国体があるので、いろいろなスポーツ大会がある。合宿してもらうためには大会をやっていかなければならない。大会をやりながら、合宿できるように地域としてもっていくことが必要と思う。花巻市だけではなく北上市にも立派な施設があり、花巻市、北上市で見るとものすごい数の体育館などのスポーツ施設がある。これだけ揃っているところはそうはない。しかも、温泉もたくさんある。地域連携で上手くできないか。

喫緊の課題として、合宿をすると洗濯物が出てくるが洗濯機がない。我々の温泉郷の中でそれぞれの旅館が洗濯機を揃えろと言われても大変である。どこかの地域にまとめて洗濯機を置くことができないか。北上市も同じだと思うが、国体に向かってぜひ検討していただきたい。コインランドリーのマップを作ってはどうかという話もあるが、国体を契機とした環

境整備として、合宿客を取るために地域全体としてやっていくことが必要ではないか。間違いなく団体客は減っているので、スポーツ合宿なり団体を地域に引っ張ってくるのが重要だと思っているので、前向きな検討をお願いしたい。

○伊藤さん

地域の力、宝は、特に花巻市では経営者の力であり、とにかく人材育成をしていただきたい。人材育成こそ、地域の糧だと信じている。一社一億、百社集まれば百億円の地域経済になるので、それを私たちはこれから10年間取り組んでいく必要がある。花巻商工会議所青年部で、昨年、会長から全体事業検討特別委員会に任命され、140名の青年部のメンバーに、私たちの一番大事なことは何かと聞いたら、経済だという。なぜ花巻市に仕事があるかという、安いからで、頼まれたらイエスと言って一生懸命やる。私たち製造業はそういう中でやっている。世界に通じるような技術を一社が一つアイディアを持って、この仕事では飯を食えるというような金のなる木を一つ持って、それを武器に商売ができないかと考えている。経営者はまず勉強することだ。先日、東京で24都府県の経営者が集まって勉強会を行ったが、東京の社長たちですら危機感を持って勉強している。私たちが勉強したことが社員に伝わり、社員から家族に伝わる。地域に出れば地域の人たちに伝わり、PTAに出ればPTAに伝わるということをやっていく必要がある。

今日の話で重要なのは、小手先だけの解決ではなく、10年後、30年後、自分の子供たちが大きくなった時の花巻、岩手を思って考える着眼点を持つことだと思う。

私たちのお客さんも取引先もお金がない。そんな中でも、私たちに仕事を出したいと思って一生懸命やっている。貧乏でも知識や技術を得て得意なものがあれば、例えば美味しいコロッケがあるというだけで、もしかしたら人が来るかもしれない。売り方や経営者の足の運び方で自分たちの商売の可能性が広がることは、ビジネスとしていっぱいある。私たちが力をつけて、地域の子供たちが力をつけて兄弟を育み、この岩手を何とかしようと思いが、そんな一人一人をつくっていくことでもう少し何とかできるのではないかと。先ほど小友さんから規制緩和の話があったが、もしかしたら私たちに相談したら、そこを打破できるかもしれない。行政とか誰々がどうこうと言わないで、みんなで手を組んで、お互いを尊重して足を引っ張らずにやっていく必要がある。PTAの会長をしているが、今子育てしている親は、本当に忙しい。30代40代は一人でいろいろな掛け持ちをしながら、地域のことや会社のことを何でもやっている。行政や議員から助言などの支援があれば、もっと有意義に短い期間ですごいヒントをもらえたりするのではないかと。

また、高校の先生方がその地域で教鞭をとるなら、地元に残れと言うような先生を増やさないとダメと思う。今年、青年部は、管内の進路指導の先生方を集めて、私たちの会社の発表会をする。ぜひとも、卒業生を花巻市、岩手県に残してくださいという話をする。賛同していただけるかどうかかわからないので、何年も続ける。教育格差にならないように、何とかしなければならぬと思っています。

○臼澤議員

今日のテーマの中で、人を縦軸に、土地を横軸に話を聞いていた。先ほど、花巻駅から200メートルの中心街の遊休土地等を活用しながら、人口減少の時代の中で、どのように地域をつくっていくのかというリノベーションの話があった。また、エリアの組み方も、久保田さんがやっている広域観光という意味でいけば、広く、花巻市、北上市、奥州市、あるいは県に限らず東北、北海道も含めてという視点でもう一度考えていかなければならないと思う。さらに、時間軸は、今なのか、5年先なのか10年先をみるのかという視点も重要である。

一つ聞きたいのは、皆様が各地域の中心となって活動しているエネルギーはどこからきているの

か。今日の出会いで皆さんがつながって、新たな面白い取り組みができていくことが今日の意義であると思うし、県振興局のつなぎ役としての役割が期待されているのではないかと思う。25年間県庁に勤めたが、県職員も頑張っている一方、多少失敗することを恐れている面もあるように思う。そうした中で、皆様の思い、エネルギーの源、そして取り組んでいる中での障害についてお話をお聞きしたい。

【回答：小友さん】 エネルギーと言われても、自然にやっている。先ほどお話ししたように自分が住みたい、暮らしたい部屋をつくる感覚が一番近い。子供の時は自分の部屋しか実現できなかったものが、大人になって社会的影響力という大げさかもしれないが、もっと拡大していけると思っている。

あとは、東京のITの会社に勤めたのが大きい。ITの世界は、全員素人。iPhone（ 아이폰）は、どんなにプロでも、開発されて6、7年しか経っていないのでみんな手探りで、勝ったり負けたりしている業界である。よくわからない、どうするか、それならやってみようというのは自然なことで、そういう慣習、通例があるところに自分が勤めてきたから、やる前に考えようという教育や、正解は一つとか、長くやっていた方が偉いということに対しては、そんなことはないというのが自然とわかった。

【回答：久保田さん】 人口が減少しているので、地域の経済を支えるものは、観光しかない。交流人口を拡大して外からお客さんを地域に呼ぶことと、もう一つは外国人客をどう地域に呼ぶか、中長期的に戦略を立ててやることではないか。今までは、観光は観光業の人たちがやるものという捉え方だったが、農業でも商業でも、観光は交流人口を増やすためにどうするかということだと思う。そうすると、花巻市だけでどうのこうのということではなく、もっと広域でネットワークを組んでやることだと思う。花巻市、北上市、奥州市などで、観光でいろいろな業界に波及するようなお金の稼ぎ方、ネットワークをつくる。こういう若い人たちが中心になって取り組んだものに県の振興局に支援していただいて、一緒に進める体制で取り組んでいくことが必要ではないか。

【回答：昆野さん】 それぞれの観光地、地域での地域振興の取組が自分たちの暮らしになっているか。お客さんを呼ぶために一生懸命やって外貨を稼げばいいのか。それだけでは疲れる。平泉町でも観光をやるのは観光の担当の人がやって、お客さんを迎える。今まで私たちは、種類別に担当して仕事をするというのに慣れてきた。経営者が、自分はここで商売、レストランをやっていて、観光の人が一生懸命やってくれば、きっとお客さんがたくさん来るから自分の暮らしも成り立つというように思い込んでいる。

どうしてエネルギーがあるかと聞かれれば、さくらホールが一つの成功例だと思っている。さくらホールを自慢するわけではないが、さくらホールに来る人たちは、利用目的のある人たちだけではない。何の目的もない人でさえさくらホールに来て、居場所になっている。居場所として自分の地域が成り立っているか。ここに居たい、ここなら少し貧乏でも一生楽しめそう、一生充実して暮らせそうという場所を作らなければいけない。

司東さんのスポーツクラブも、競争するために作ったのではないと思う。私のNPOも芸術をやる人のためだけではなく、芸術をやらない一般の人も芸術のそばにいて暮らすという仕掛けをつくるためにやったし、今考えているのが、商店街の方だけが商売をするのではなく、それと関係ない市民の方々が、お店と関わって商売をする。あるいは、会社と関わる（一般市民やNPOが企業と一緒にやる）という発想を持って——ソーシャライジングというが——一つの職業がバラバラになるのではなく、一カ所に集まって皆で関わる。仕事をしながら

ら別の人の仕事も手伝って、その代わり何かいいものをもらう。そこにいけば仕事もできるし、楽しむこともできるというような地域になっていかなければならないと思う。

北上市長は、そこも狙っていると思う。ソーシャライジング化していけば、若い子たちも東京に行くのは一瞬で、すぐ戻ってきてやはり北上市がいいとなる。私はそういう子たちを育てるためにエネルギーを使っている。

【回答：松村さん】 商店街は必要か、商店街を生き残らせるためにはというのと同じで、商店街は必要かではなく、求められているものは何なのかと考え方を変えていく必要があると思う。それも新しい展開と思う。

◆ 感想など

○菅野座長

最後に、皆様から本日の意見交換会について御感想をいただきたい。

○伊藤さん

スポーツ、アクティビティ、行政、企業、岩手のパッケージの発信できるものが一つあったら面白いと思って聞かせていただいた。

○久保田さん

キーは人だと思う。人が集まり、コミュニティーができ、情報が集まる。リーダーシップのとれる、あるいは本気になって考えられる人をどうつくるか。そういう人たちを中心にどう固まりをつくるか。固まりが固まりとなって、ネットワークになっていく。

5年間で東北の人口は35万人減った。ということは、毎年7万人ずつ減っていて、毎年東北の中核都市が一つなくなっているようなもので、これが10年、20年経ったら大変なことになる。我々業界がリーダーシップを取りながらやっていかなければならない時代が来たのだと感じさせられた。

○小友さん

何を伝えるべきか悩んだが、一つ言えるのは、現代が治世か乱世かで言うと乱世の時代だと思うので、官民連携と呼ばれるものは民が主導で、機動力がある民をどれだけ官がバックアップできるかという体制がすごくいいと思う。それをぜひ、ここにいらっしゃる皆さんで他の行政の方にも教えていただきたい。皆さんのお仕事は仕組みづくりだと思うので、今日場で話したことをどう生かしていただけるか極めて興味関心がある。皆さんにどう変えていただけるか、期待している。

○松村さん

いろいろなお仕事の方のお話が聞けたので、つながりを強固にして、一緒にやりたいと思うことがたくさんあった。商工会議所を多いに活用し、いろいろ話をしてみたいと思う。違う意見も出てくると思うが、壁をつくることなく、一緒に交流し合い、協力していただければと思う。

○司東さん

いろいろな市町村の首長に呼ばれてまちづくりのアドバイスをくださいと言われるが、大体携わっているのは同じ人が数人で、会社を持ちながらいろいろなイベントをこなしているのは、どこの市町村も同じである。それはいいのだが、まちづくりが好きな若者もいるので、そういう方がビジネスとして、NPOなり株式会社を組織して各市町村で展開すれば、また違ってくるのではないか。

平成6年くらいからまちづくりを行っているが、当時、振興局主催で平成7、8年くらいにまち

づくり団体の連絡協議会をつくった。勉強会を開いたり、飲み会をして泊まったりと、その時はいい勉強になったし、お互いに親睦も深まった。また、そういう機会があつていいのではと感じた。

○昆野さん

私は、先ほど思いをたくさん話したのでそれ以上はないが、議会の方々に最後に一つお願いしたい。私たちの思いは、こうして現場にあるので、今日感じたことをそのまま県で生かしてもらいたい。ぜひ現場に出て、どんどん活動に参加していただければと思う。

○小堀さん

地域おこし協力隊という呼称なので、西和賀町という地域でとらわれがちだが、個人的には、全国的に地域おこし協力隊の人たちは、地理的な意味での地域にとらわれ過ぎている気がする。私の場合は、西和賀町がフィールドだが、それ以前に演劇がフィールドである。東京出身で、こちらの出身ではないので、岩手のことを全然知らないという開き直りもあったが、西和賀町にも演劇の文化があり、銀河ホール以前に劇団ぶどう座という65年活動してきた劇団がある。その劇団が、地域の言葉で地域の民話を使っているいろいろな戯曲を書き残している。なかには普遍性をもった高いレベルの芝居もつくっているのだから、そういうことを広めていきたい。

つい最近、若い人が演劇のメッカだという言い方をしてくれた時に、やめてくれと言った。私はよそのこともわかっているのだから、メッカとは言えないが、オアシスと言っていただければいいと思っている。温泉があつて、演劇専用の劇場があつて、そこで見る、そこでつくるとなったら、大変すばらしい環境なので、そういったところをこれからアピールしていきたい。

私たちが町の広報紙をつくる時に気にしているのは、コンセプトをはっきりさせるということ。町の人たちの個人的な生い立ちや、どんな暮らしをしているのかということや、それを語るというコンセプトでやっている。先ほど渡辺議員からお話があつたような、物語性ということや、西和賀町にどんな物語が眠っているのか、私たち若い世代がこれからどんな物語を作っていくのかということを見守っていて欲しいと思う。

お陰様で学生演劇の合宿事業に参加した仙台の学生が、東京と仙台で公演する国際的なダンス公演の滞在製作を西和賀町で開催しないかと言ってくれた。町として事業化するのには難しいということで、完全にプライベートでいろいろなところに掛け合つて、囲炉裏のある古民家に住んでいる自分の家も含めて、3カ所ほどで滞在してもらおう。海外からも10カ国くらい来てくれる。今は、商売、経営というところまでいっていないが、そういうところも頑張っていきたいと思う。西和賀町は大型店がなく、店は大体8時くらいに閉まって子供たちが健全に暮らしているところなので、逆にそれが強みになるのではないかと感じた。北上市、花巻市の皆さんのお話を聞いてみると、やはり西和賀町の身の丈は違うので、お互いにいい方向にいけたらと思う。そういう意味で、演劇に限らず、オアシスとしてこれからも続けて行けたらいい。

◆ 閉会

○菅野座長

本日皆様からいただいた御意見については、これからの県政のために、県議会議員全員と共有しながら、しっかりと生かしていきたい。また、今後、御意見・御要望があれば、地元の県議会議員あるいは県議会事務局までお寄せいただきたい。

本日は、お忙しいところ、御参加いただき誠に感謝申し上げます。